

家族経営農業と農産物市場

現在、世界のほとんどの国において、農業生産、特に土地利用型農業の基幹的部分は家族経営によって担われている。圧倒的な規模を誇るアメリカ、オーストラリアといった新大陸諸国においても同様であり、また、穀物の流通、加工に係るあらゆる分野に進出する穀物メジャーも、穀物生産自体への進出には極めて慎重である。

こうして農業において家族経営中心の生産構造が維持されている背景には、それなりの理由があろう。そもそも、自然と生命に深くかかわる農業生産には、多くの制約条件が存在する。生産が気候条件に大きく依存し、必要とする労働力の繁閑が著しく、生産物の長期の保管が難しく、さらに、生産資源を弾力的に他の生産に転換することも難しい。そうした制約に対しては、企業的農業よりも、むしろ家族的農業の有する柔軟性・弾力性が優れているといった面が少なからずあるものといえよう。

農業における家族的経営の維持には、単なる生産面の必要性という以上に大きな意味があるように思われる。自然を相手とし、自らが主体となって行う労働には(厳しさと同時に)都会の管理された労働には無い自由と喜びがあろう。都市の労働者が、「労働力」として管理され、ますます疎外感を強めつつある現代社会において、家族経営を維持し、健全な農村社会を維持していくことの意味は、決して小さいものではないように思う。

ブラジルの大規模農場を経営していくためには、その周辺に労働需要の繁閑に応じて調達可能な大量の貧しい「農業労働力」が不可欠となる。その結果、農村の治安は極めて悪く、農場は鉄条網で囲まれ、富裕な農場主たちは銃を持った警備員に警護されているという。それは、われわれの有する「農村」のイメージとは、もはや遠くかけ離れたものであり、高い生産性と引き換えにブラジル農業が失っているものも限らない。

一方、家族経営中心の農業・農村社会を維持していくうえで、生産者が市場とどう向き合っていくかということは常に大きな問題となる。大半の生産者にとって、ますます大規模化が進む流通・加工業者と直接対峙することは極めて難しい。また、生産物の価格を自ら決定することも極めて難しく、価格変動のリスクにさらされざるをえない。一部の農業者は、その努力と才覚によって生産物を差別化し、独自の販売ルートの開拓、価格の決定、といったことも可能かもしれない。しかし、「差別化」は極めてわずかであるからこそ可能となるものであり、大半の家族経営にそれを求めることは不可能である。価格支配力と価格変動リスクの問題は、小規模生産者が市場と対峙するうえで、常に避けて通れない問題であるといえよう。

本号では、そうした農業者と農産物市場に係る問題として、近年わが国で議論となっている独占禁止法と農協事業との関係について、また、生産農家の協同の力により国際的な乳業メーカーに伍していくことを可能としたデンマークおよびニュージーランドの酪農組合の事例について取り上げている。また、価格支配力を有しない個別農家の価格リスクヘッジ手段として近年一部で議論されている穀物先物市場について、アメリカの事例を分析し、その内包する問題を紹介する。

((株)農林中金総合研究所 取締役基礎研究部長 原 弘平・はらこうへい)